岩手県一関市東山町における動植物の認知度の調査について

岩手大学　学生会員　○駒木　雅国　岩手大学　フェロー　安藤　昭
岩手大学　正会員　赤谷　隆一　岩手大学　学生会員　小形　友美
岩手大学　正会員　南　正昭

1 はじめに

我々は日常様々な動植物を目にして生活している、特に東北地方は自然豊かな気候風土に恵まれ、一般に広く知られる動植物(典型種)は勿論、存在が稀少な動植物が生息している。

しかし、環境の変化に伴い、全国規模で動植物の生態系に変化が表れ、専門家や行政によって稀少な動植物と人間が隔離されているのも事実である。

本研究では、自然豊かな東北地方の岩手県一関市東山町の住民を対象に、動植物に対する認知度を調査した。その結果から稀少な動植物との関わりを検討しようとするものである。

2 調査の概要

調査は平成 19 年 10 月 2 日～10 月 4 日、岩手県一関市東山町において、住民 70 人に実施した。専門化の意見を参考に、一般に知られていると思われるもの(典型種)、また環境省、岩手県のレッドデータブックにランクされている稀少な動植物を鳥類 28 種、哺乳類 17 種、両生類 11 種、爬虫類 8 種、植物 54 種、昆虫 21 種、魚類 15 種各々選定し、町民の認知の程度、また町内でどの程度確認されているかの調査を行った。認知・確認の程度を認知度(%)、確認率(%)として、次式で定義した。

認知度＝（ある動植物を知っていると答えた人数/全被験者）×100
確認率＝(ある動植物を東山町で見たことがあると答えた人数/全被験者）×100

また、稀少度についての定義は次の通りである。

＜環境省レッドデータブックの選定基準＞
VU‥絶滅危惧Ⅱ類　　NT‥準絶滅危惧
EN‥絶滅危惧ⅠB類　　CR‥絶滅危惧ⅠA類
＜岩手県レッドデータブックの選定基準＞
ランク A→B→C→D 順に絶滅危険度が低い
D ランク‥優れた自然環境の指標となる
情報不足‥評価する情報が不足している

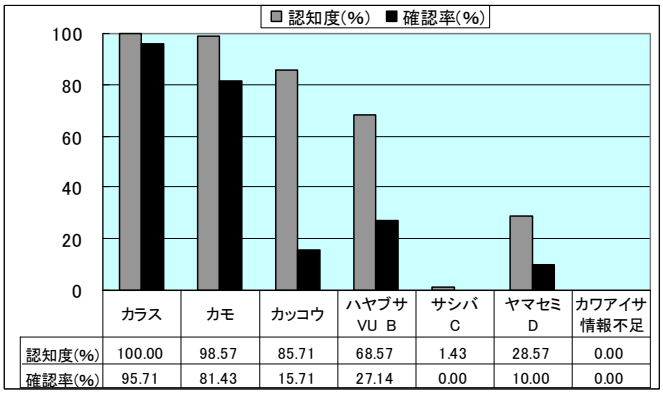
被験者属性については以下に示す。

年齢	男	女	東山町在住年数	
20～29 歳	8	7	20 年未満	23
30～39 歳	8	10	20 年以上	47
40～49 歳	12	6		
50～59 歳	7	10		
60～69 歳	1	1		
計	36	34		

3 調査結果

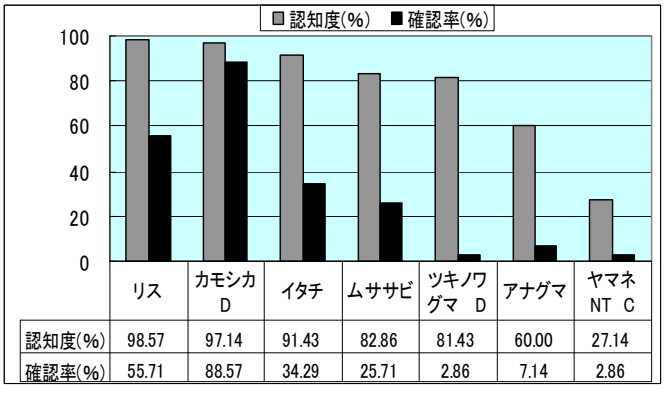
下記に各類の認知度、確認率を表・グラフで示す。なお本発表では、種類の多いものについては簡略して示すことにする。尚、種名の後に稀少度を示す記号を記載する。

(1)　鳥類



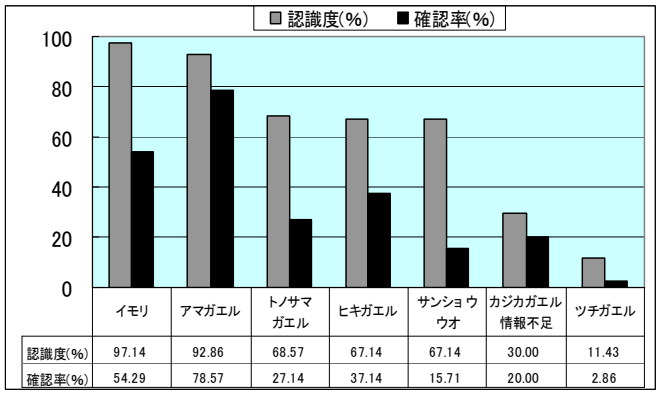
	カラス	カモ	カッコウ	ハヤブサ VU B	サシバ C	ヤマセミ D	カワアイサ 情報不足
認知度(%)	100.00	98.57	85.71	68.57	1.43	28.57	0.00
確認率(%)	95.71	81.43	15.71	27.14	0.00	10.00	0.00

(2)　哺乳類



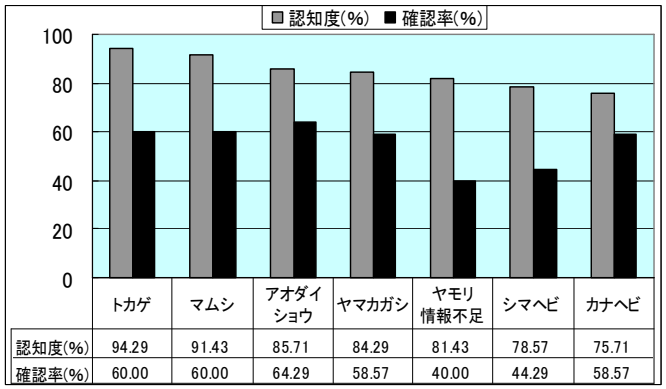
	リス	カモシカ D	イタチ	ムササビ	ツキノワグマ D	アナグマ	ヤマネ NT C
認知度(%)	98.57	97.14	91.43	82.86	81.43	60.00	27.14
確認率(%)	55.71	88.57	34.29	25.71	2.86	7.14	2.86

(3) 両生類



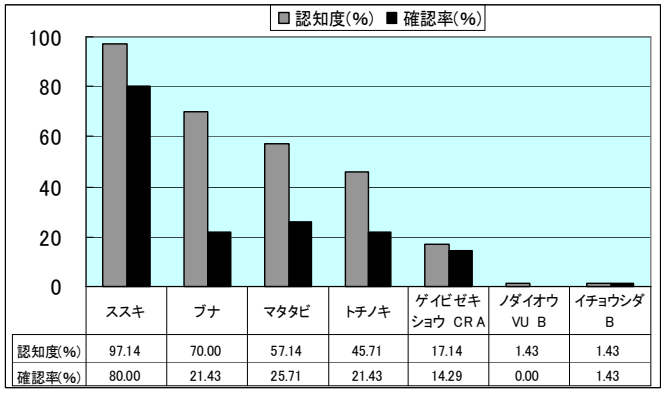
	イモリ	アマガエル	トノサマガエル	ヒキガエル	サンショウウオ	カジカガエル 情報不足	ツチガエル
認識度(%)	97.14	92.86	68.57	67.14	67.14	30.00	11.43
確認率(%)	54.29	78.57	27.14	37.14	15.71	20.00	2.86

(4) 爬虫類



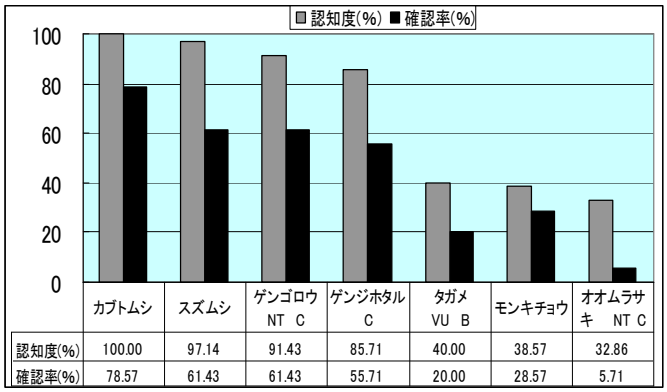
	トカゲ	マムシ	アオダイショウ	ヤマカガシ	ヤモリ 情報不足	シマヘビ	カナヘビ
認知度(%)	94.29	91.43	85.71	84.29	81.43	78.57	75.71
確認率(%)	60.00	60.00	64.29	58.57	40.00	44.29	58.57

(5) 植物



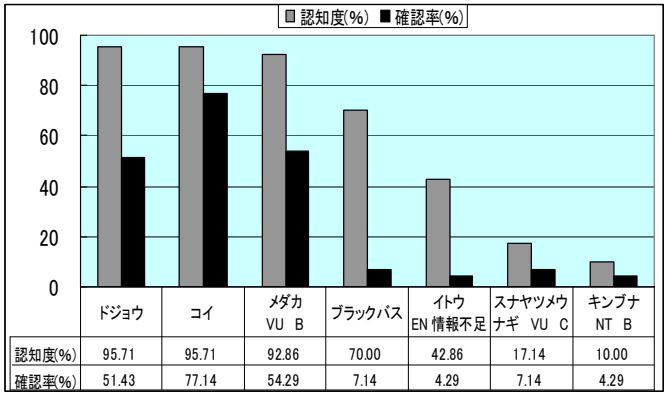
	ススキ	ブナ	マタタビ	トチノキ	ゲイビゼキショウ CR A	ノダイオウ VU B	イチョウシダ B
認知度(%)	97.14	70.00	57.14	45.71	17.14	1.43	1.43
確認率(%)	80.00	21.43	25.71	21.43	14.29	0.00	1.43

(6) 昆虫



	カブトムシ	スズムシ	ゲンゴロウ NT C	ゲンジホタル C	タガメ VU B	モンキチョウ	オオムラサキ NT C
認知度(%)	100.00	97.14	91.43	85.71	40.00	38.57	32.86
確認率(%)	78.57	61.43	61.43	55.71	20.00	28.57	5.71

(7) 魚類



	ドジョウ	コイ	メダカ VU B	ブラックバス	イトウ EN 情報不足	スナヤツメウナギ VU C	キンブナ NT B
認知度(%)	95.71	95.71	92.86	70.00	42.86	17.14	10.00
確認率(%)	51.43	77.14	54.29	7.14	4.29	7.14	4.29

4 考察

全体的に、稀少種に限らず、広く生息している種(典型種)についても見たことがない人が意外に多く、動植物に対する意識の低さを感じた。

稀少な動植物は、植物の盗掘や不正に動植物が捕獲されるのを防ぐために、専門家や行政によって我々から隔離されているのが現状である。これでは、メディアや教本の中、また想像上の生物となってしまい、関心など持てないであろう。そこで、地域住民で盗掘や不正捕獲から稀少な動植物を守る意識を構築出来れば、自然の営みを実感できる場や機会が増えるのではないだろうか。しかし、既に地域住民の意識改革が実践されている海外では、盗掘などが減るまでに 60 年かかったという記録があり、我が国でも早急に対策を講ずるべきである。

そこで注目すべき事業として、自然豊かな東北地方だからこそ出来る、自然体験プログラムがある。野生の動植物を観察したり、自然と親しむ内容が多く、自治体や NPO 法人等と地元住民で実施しており、県内でも多くのプログラムが実施されている。自然と触れ合う機会が少ない首都圏などの都市部からの参加者が増加しているという。

このように、野生の動植物の自然の営みを感じ、刺激を受けることで、動植物に対する意識が芽生え、身近な自然・生き物の重要性が実感としてわかり、傷つけないよう自制する心を養うことができる。このサイクルが一般に普及するようになれば、生態系の保全・復元も進み、稀少な動植物を目で見て感じることが出来る機会が増えるのではないかと思う。